

氏名(本籍)	たけ うち やす し (徳島県) 竹 内 康 史 (徳島県)		
学位の種類	博 士 (文 学)		
学位記番号	博 甲 第 4200 号		
学位授与年月日	平成19年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	前期サルトルにおける〈道〉の諸相		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学助教授		青柳悦子
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	小川美登里
副査	筑波大学講師	博士(文学)	齋藤 一
副査	立教大学教授	博士(哲学)	津田直之

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、20世紀を代表するフランスの思想家・哲学者・文学者ジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-80) がその前期において執筆したさまざまな著作を〈道〉という主題のもとに読解したものである。

本論文の構成は以下のとおり。

序章

第1部 〈道〉を描くサルトル — 前期サルトルの文学作品の再考

- 第1章 『嘔吐』における2つの冒険 — 都市ブーヴィルの交通
- 第2章 前期サルトルの文学作品における〈道〉の変容
- 第3章 映画『賭はなされた』における〈道〉とその政治性
- 第4章 『猶予』と交通

第2部 〈道〉を歩むサルトル — 前期サルトルとジャーナリズム

- 第5章 パリの群衆たち、アメリカの都市 — 取材記者サルトル
- 第6章 『文学とは何か』と編集者サルトル
- 第7章 サルトルの他者論と〈道〉

結章

序章では、本論文の主題とする〈道〉という概念をこれと関連するフランス語の語彙 (《rue》, 《avenue》, 《boulevard》, 《route》, 《voie》, 《chemin》など) を総合するものとして定義し、サルトルの1949年までの著作を扱う理由を説明した上で、論文全体の問題提起をおこなっている。

第1部では、文学作品を対象として、サルトルのテキストに〈道〉のテーマから照明を当てている。

第1章は『嘔吐』が、「通り」rueを主人公が歩くことによって成立する冒険小説であることを分析し、

とくにこの小説を、1930年代のフランスの地方都市の諸相を同時代的に反映した作品として提示している。第2章は『嘔吐』から『自由への道』にいたる小説群のなかで〈道〉に関連する語彙がどのように変遷したのかをたどり、1940年代に「群衆」foule という概念が導入されることで、サルトルの問題系に大きな変容が生じたことを論証している。第3章では、映画シナリオ『賭はなされた』を採り上げ、〈道〉が労働者や軍隊の行進の場とイメージされていることを指摘し、同時代状況に対するサルトルのアクチュアルな反応としてこのテキストを読み解いている。第4章では長編小説『自由への道』の第2部『猶予』を分析して、この作品に現れるさまざまな交通や交通手段の描写が、どのような歴史的状況への示唆を含んだものであるかを解明している。

第2部では、ジャーナリストとしてのサルトルの誕生とその特性を論じ、さらに哲学的研究も〈道〉という主題を媒介にしてサルトルの同時代問題意識を明確に反映していたことを明らかにしている。

第5章では、第2次大戦の終結期に『コンバ』紙に連載されたサルトルの報告記「蜂起下のパリの散歩者」およびその他の新聞への寄稿記事を検討して、〈道〉を歩くことから出発したジャーナリスト・サルトルの形成を検証している。第6章では、当時有力な文学雑誌の編集者でもあった批評家ジャン・ポーランの主張とサルトルの主張を丹念に比較検討することによって、新時代の「大衆」的読者層をはっきりと念頭に置いていた文学・思想雑誌編集者としてのサルトルの斬新なヴィジョンを析出している。第7章では、前期の哲学的著作である『想像力の問題』および『存在と無』を読解し、これらの著作でも〈道〉の主題がサルトルの思想を貫いていること、とりわけ「通り」における「群衆」をまなざすことで「われわれ」 nous という集合的な主体意識が形成されていることを論じている。

結章では、本論文が、前期サルトルを以上のようにまず文学者として捉え、テーマ論的に〈道〉という問題設定からサルトルの問題意識を再検討したことによって、文学・ジャーナリズム・哲学の三領域を総合する新たなサルトルの輪郭を浮上させることができたことを確認している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文はまず、サルトル前期の小説作品および映画シナリオにおいて〈道〉というテーマがどのような諸相を喚起しているのかを丹念に検討した点に独自性を有する。第1部のこの作業によって、本論文はこれまで思想的な読解が主流であったサルトル研究に新たな方向性を切り拓いた。とりわけこれまで着眼されることのなかった〈道〉という主題を新規に設定したことはきわめて意欲的で大胆な試みとして特筆すべきであり、その成果として本論文は、サルトルの文学テキストに清新な触発力を見出すことに成功している。

かくして文学者サルトルの復権を可能にした上で、第2部ではジャーナリストとしてのサルトルという新たなサルトル像の提示を試み、さらにこうして得られたサルトルの新しい姿を、哲学者としてのサルトルとも接続するという、総合的なサルトル研究を展開している。こうした作業によって本論文は、あまりにも巨大であるがゆえに断片化しがちなサルトル研究の動向そのものに対する挑戦ともなっている。この包括的なサルトル像の新たな構築という困難な作業を支えているのは、〈道〉という本論文独自の主題にほかならない。本論文が卓抜なテーマ設定によって、多領域にわたる前期サルトルの活動を一まとまりの問題意識に貫かれたものとして総括できたことは大きな功績である。

本論文は、サルトルに関連する膨大な先行研究を丁寧に渉猟したうえで展開されたものであり、自らの立論に必要な適切な先行研究に随所で触れている点でも、学問的信頼に値する真摯な研究たりえている。

とくに本論文の貴重な功績として挙げられるのは、サルトルを同時代の社会的文脈との対応において検証し直したことである。第二次世界大戦前、戦中、占領期、戦後と、短期間でめまぐるしい時代の変化を経験した1930-40年代のフランス社会の実相を、サルトルのテキストがいかに敏感に反映し、またテキストの中

でサルトルがこうした社会状況へのみずからの反応をいかに鮮明に刻み込んでいるかを、本論文は鋭く指摘している。本論文がそのために掘り起こした、フランスにおける鉄道網の再整備、都市と郊外との分化と連接、戦争による交通事情の変化、労働運動の空間あるいは国家的軍事活動の象徴的顕現の空間としての道路、見知らぬ人（匿名の他者たち）とのコミュニケーションの場としての都市の街路、飛行機の発展と大衆社会の到来との合致などは、サルトル研究者ならずとも興味を喚起される場所である。

さらに本論文の功績としては、これまで少なくとも日本ではきちんと研究がなされてこなかった1944年パリ解放時にサルトルが新聞に寄稿したルポ記事を重要なテキストとして採り上げ、翌年の訪米記事と併せて論じた点が挙げられる。路上からの報道記者の側面を持つジャーナリスト・サルトルという新たな像が、ここから析出された。

以上のように本論文は、多くのすばらしい着想と創意を含むものであり、いくつもの斬新な成果を達成しているものではあるが、不足の点がまったくないわけではない。着眼点は新鮮なものの、小説作品の読み込みや種々の問題の考察が十分な展開に至っているとは言えない点や、〈道〉という主題を構成する諸概念の検討に残る甘さ、また、現代社会と〈道〉という関心からすれば当然言及されるべきサルトルおよびサルトル以外の多様なテキストを採りあげていないことなどである。しかしこれらは、一貫した論を完遂するという目的のためにはあえて先送りせざるをえなかった点でもあり、本論文がサルトル研究の刷新においてなした功績はいささかも揺らぐものではない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。